第二回リレー小説「梅雨」白組二番手

春菜晴彦

いつしか雨音は不思議な力をもって私を捉えた。

それはたとえば、件の作中Ｋの自殺に衝撃を受けているときだ。或いは堕落してゆく葉蔵を嘆いているとき。路地を濡らす雨粒の、最初の一滴が自室の窓を叩くと、私はどれほど夢中になっていようとも一瞬で連れもどされた。ゆっくりと本を閉じ、耳をそばだてる。

じきに本降りとなるのだろう。どこからか下水を思わせるすえた臭いがしてきて、それからじっとりとした湿気が部屋全体を覆う。窓を揺らした響きはやがて断続的な水音に変わる。すると私は急に居ても立ってもいられなくなった。

脈打つ胸に手を当て、喝采にも似た雨音に耳を傾ける。

　通り魔の存在が囁かれ始めたのは翌週の月曜だった。その日暗雲が切れ目無く空を覆っていて、朝から仄暗かった。一限を終えた私が図書館へと歩を進めていると後ろから呼び止める声がした。私は振り向いた。十和田さんだった。

「おはよ。掲示板見た？　なんか怖いね、津理恵ちゃん」

　萌黄のワンピースに身を包んだ彼女は私が見たとも見ぬとも言わないうちからぷるぷる震えていた。首などすくめていて芸が細かい。私は「まだ見てない」と言った。

「え？」「まだ見てないの。掲示板。一限、あったから」私が繰り返すと、得心行ったように「そうなんだ」と呟く十和田さん。次いで私の手を引き、こっち、こっちと促す。説明するよりは実物を見た方が早いということなのだろう。引きずられるようにしてついて行った。掲示板の辺りは人でごった返していて、すごく蒸し暑かった。私たちは、立ちはだかる肉の壁を押し分け押し分け（押し分けていたのは主に十和田さんである。私は彼女が作り出した道をしゃなりしゃなりと歩んだに過ぎない）、ようやっと端に辿り着いたころにはへとへとになっていた。十和田さんが「あれ見て。ほら、授業変更の横にあるやつ」と指した。つられて見上げる。私より頭ひとつも高い位置に『注意！』と書かれたプリントが掲示してあった。右隣には英訳したものが同じく画鋲で留められている。プリントには連続通り魔が発生した旨がポップ体で記されていた。現段階での被害者は皆、女性。深夜に外を歩いていた所を襲われたのだという。鈍器のようなモノで後頭部を殴打したのち、犯人はすぐに立ち去る。金品等の被害は無し。犯人は未だ捕まっていないとのことだった。

「女性の一人歩きには注意してください、か。けっこうきついよね。気をつけてても夜出歩いちゃうことだってあるし、今日見たいに曇ってる日なんかすぐ暗くなっちゃうし」

　私は、そうねえ、と相槌をうってから「彼氏でもいれば送ってもらえるのにね」と言った。十和田さんは一瞬きょとんとしたあとで「そうそう。彼氏がいればね」と言ってくすくす笑った。「送ってもらって、通り魔に襲われたら彼には盾になってもらうことにする」

　異議無し、と返してから私も笑った。

　通り魔に教われた学生はほとんどが将来を有望視された人間だったようである。これは後から聞いた。インカレを控えた陸上選手、研究が認められた大学院生。中には普通の生徒もいたらしいが少数である。もしその噂が正しければ私に危害が及ぶことはまずないだろう。十和田さんに「鳥取砂丘にいかない？」と言ってみたところへんな顔をされた。大方冗談だと思っているに違いない。私が「雨、うっとしいでしょう。乾いたところにいこうよ」言うと、「鳥取砂丘は砂漠じゃないでしょう」と返された。

　翌日は曇りの予報だったが午後からぽつぽつ降り出した。普段ならこの程度の雨、気にすることもないのだけれど、しかし気怠い湿気の中、自ら濡れに行くのもなんだか億劫で、それで、延々とデッキをシャッフルしながら窓の外を眺めていた。すると「傘、持ってきてないの？」と声をかけられた。遣ると、綾瀬だった。同じサークル、学科の男子である。「津理恵ちゃんの家って駅のほうだったよね。俺今日車だからさ、よかったら乗ってかない？」

「持ってない。別にいい」と返すと、綾瀬は「風邪ひくぞー」と言いながら正面の席に腰を下ろした。余計な世話。あと下の名前で呼ぶな。頬杖をついた綾部を睨みつつ、私は「帰るんじゃないの。綾部君」と言った。

「そのつもりだったんだけど、もう少しぷらぷらしててもいいかなー、って。暇だし。津理恵ちゃんこそまだ帰らないの？　雨、弱くなんないと思うよ。あ。もしかして、誰かと待ち合わせしてるとか？」

「別にそういうわけじゃ」と言いかけた所で遮られる。

「おっ、じゃあ暇なんだ。仲間じゃん。暇仲間」

　綾部の首では銀のネックレスが光っていた。その鈍い反射を見つめながら、私は「この人はどうして私に話しかけてくるのだろう」と考えた。特別親しくもない。この場に拘束されているわけでもない。話題があるわけでもない、この男の子は、どうしてめげずに話しかけてくるのだろう。愛想良く返事してる訳でもないのに。仕方なく私は鳥取砂丘について想像を廻らせることにする。鳥取砂丘。鳥取県鳥取市の日本海海岸に広がる広大な「あーでもさ。最近レポート多すぎじゃない？　今週なんかはいい方だけど、」砂礫地で、日本三大砂丘「先週とかやばかったじゃん。俺マジ詰むかと思ったわ」の一つに数えられる。「そうなんだ。私はそうでもなかったけど」日本最大の観光砂丘でもある。国の「マジか。実は津理恵ちゃんて、頭いいひと？　見た目によらず」天然記念物に指定されている。「なにそれ。失礼」「あは、冗談だって。なんか津」日本の地質百選にも「理恵ちゃんってぼーっとしてるイメージあったからさ」選出された。「そうかなあ」往復の電車賃は「そうそう」二万五千円。高い。

「ほら、今だって上の空で会話してるでしょ」

　唐突に指摘されて、少しぎくっとした。意外に勘がいい。

「まあいいんだけど。でも本格的に暗くなる前に帰った方がいいぜ。例の事件知ってるでしょ。ほら、通り魔のやつ。ダチがひとりあれに遭ったみたいなんだけどさ、結構ひどい怪我だったぽいよ。ひでえことするよなあ。ひでえよ」

「うん。ありがと」私は話を短くたたもうとして、途中でふと思いつき「綾部君って梅雨好き？」と訊いてみた。「梅雨？　梅に雨って書くほうの梅雨だよね」「そう」

　綾部は一瞬考えるみたいな仕草をしたあとで「津理恵ちゃんはどっちが好き？」と言った。私は嫌いだ、と思った。

　少し回り道をして帰った。真っ暗な道を通りたくなかったから。結果、大通りをまたいで帰宅することになる。ざああという音が反響する。靴が濡れて張り付く。初夏の熱気は湿気と混ざり合い淀んでいた。傘を避けて見る視界は狭く、なるほど、通り魔などやろうと思ったらこんな日はうってつけなのだろうなと思われた。這い出しているみみずを踏んでしまわぬよう、ことさら注意して歩を進めた。

　大学会館の裏手を直進していると、やがて入り組んだ路地にさしかかる。両塀が板に挟まれた通り。緩やかな上り坂になっているらしく、道脇には細い川ができていた。坂を上りきってしまうと、さっきまで自分がいた大通りを見下ろすことができる。そこでは通り魔が行われていた。今まさに一撃を食らったところなのだろう、髪の長い女性（おそらく。大通りとはいえ、さすがに暗いためよく見えない）が声も無くうつぶせになって倒れていた。これもまた暗くてよく分からないのだが、おそらくは出血しているようである。付近の水が黒く濁っていた。犯人はその上に馬乗りになって、さらに暴行は続けている。彼（犯人が男か女かわからないが、とりあえず彼と呼ぶことにする）は、なんだかよくわからないが、ぞわぞわしていて、気持ち悪かった。形容し難いもにょもにょした生き物。みみずみたいだなと思った。一旦そう思うと、とたんに彼がみみずにしか見えなくなるから不思議である。みみずはひとしきり女性を殴って満足したのか、どこかへ消えていった。その消え方というのも、まさにみみずがぐでんぐでんと土を這うような消え方だったので、私は彼がみみずであるとの認識を強めるに至ったのである。残された女性はぴくりとも動かなかった。スカートがめくれ、白い腿があらわであった。初夏とはいえ、叩き付ける雨は容赦なく体の熱を奪ってゆく。

　私は「ふむ」とひとりごちたあとで、広がる砂丘に想いを馳せながら帰路を歩んだ。